

芥川龍之介

或日のこととございます。お釋迦様は極樂の蓮池のふちを、獨りてぶらぶらと歩きになつていらつしやいました。

池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何もいへない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。

極樂は丁度朝でございました。

やがてお釋迦様はその池の縁にお行みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覽になりました。

この極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つてをりますから、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るやうに、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、韃陀多と云ふ男が一人、外の罪人と一しよに蠢いてゐる姿が、お眼に止りました。

この韃陀多といふ男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろ／＼悪事を働いた大泥坊でございます。が、それでもたつた一つ、善い事をした覚えがござ

うその蜘蛛を殺さずに助けてやりました。お釋迦様は地獄の容子を御覽になりながら、この韃陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しに

います。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えしました。そこで韃陀多は早速足を舉げて、踏殺さうと致しましたが、

「いや、いや、これも小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無暗にとるといふ事は、いくら何でも可哀さうだ。」と、かう急に思ひ返してとうと



上に、極樂の蜘蛛が、一匹美しい銀色の糸をかけてをりました。お釋迦様はその蜘蛛の糸をそつとお手にお取りに



せう。

もし萬一、途中で断れたといたしましたら、折角こゝへまでのぼつて来た、この肝腎な自分までも、もとの地獄へ逆おとしに落ちてしまはなければなりません。そんなことがあつたら、大變でございます。が、さういふ中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まつ暗な血の池の底から、うよ／＼と這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼつて参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまふのに違ひありません。

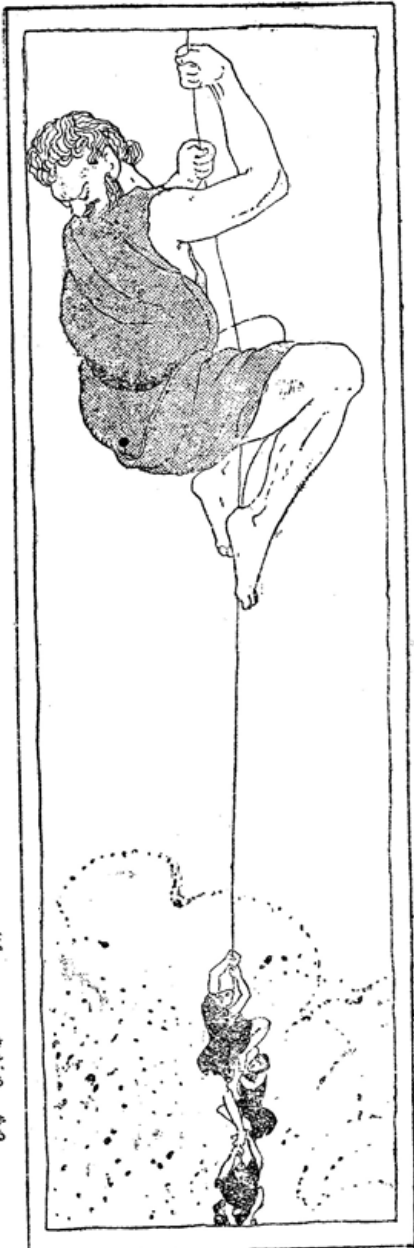
そこで韃陀多は大きな聲を出して、

「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一體誰に尋いて、のぼつて来た。下りろ。下りろ。」

と喚きました。

その途端でございます。

今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に韃陀多の



もとの地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦さまの目から見ると、淺間しく思しめされたのでございませう。

しかし極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。

その玉のやうな白い花は、お釋迦さまのち足のまはりに、ゆら／＼露を動かしてをります。

ぶら下つてゐるところから、ぶつりと音を立て、断れました。

ですから、韃陀多もたまりません。あつといふ間もなく、風を切つて、獨樂のやうにくる／＼まはりながら、見る見る中に暗の底へ、まつさかさまに落ちてしまひました。

後には唯極樂の蜘蛛の糸が、きら／＼と細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございます。

三

お釋迦様は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をちつと見ていらつしやいました。が、やがて韃陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶら／＼と歩きになり始めました。

自分ばかり地獄からぬけ出さうとする、韃陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰をうけて、

そのたんびに、まん中にある金色の蓮からは、何とも云へない好い匂が、絶え間なくあたりに溢れ出まします。

極樂ももうお午に近くなりました。